

氏名(本籍)	おお あし おさむ 大 芦 治 (栃木県)
学位の種類	博 士 (心 理 学)
学位記番号	博 乙 第 2085 号
学位授与年月日	平成 17 年 1 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	タイプ A 行動パターンに関する心理学的研究 - 発達過程における諸要因の分析 -
主 査	筑波大学教授 教育学博士 新 井 邦二郎
副 査	筑波大学教授 教育学博士 徳 田 克 己
副 査	筑波大学助教授 博士(心理学) 濱 口 佳 和
副 査	筑波大学助教授 教育学博士 服 部 環

論 文 の 内 容 の 要 旨

(1) 目的

本論文は、虚血性心疾患の心理・行動的危険因子として知られるタイプ A 行動パターン（以下、タイプ A）に関する研究のうち主に心理発達の側面の解明をめざしたものである。こんにち、このタイプ A について実証的研究が多く報告されている一方、発達モデルと呼べるものは Price (1982) と山崎 (1995) の 2 つのみである。具体的には、次の 4 つの課題を立てて研究した。(1) 旧来の研究ではタイプ A の発達要因としての両親の養育態度が重視されてきたが児童後期以降では他の諸要因も検討されるべきである。(2) タイプ A を形成させる直接的要因としては Price のいう信念 (belief) が重要と考えられるが、その信念の形成やそれがタイプ A の発達に与える過程の実証が必要である。(3) タイプ A の発達要因としての養育態度が、社会的要因によって信念が形成される橋渡しの役割 (媒介手段; vehicle) を果たしている点を実証する余地がある。(4) 先述の 2 つのモデルのなかで個人的先行要因とされた部分の具体的な議論や実証が残されている。

(2) 対象・方法

論文の全体は 3 部構成となっている。第 1 部 (第 1 章～第 3 章) は、タイプ A に関する心理学的な諸研究の文献展望を行った。第 2 部 (第 4 章～第 9 章) は、タイプ A の発達について、小学生、中学生ならびに大学生を対象として質問紙法を用いた実証的研究を行った。第 3 部 (第 10 章) は、上記研究の結果について議論を行った。

(3) 結果・考察

主な結果は、以下のとおりである。

- ① 「学業や学歴面での達成を重視する信念」が小中学生でもタイプ A と関連していることが見いだされた。そうした信念がタイプ A の発達に時間的に先行する要因となっていることが確認され、さらに信念の形成に学習動機づけが関連し、またその学習動機づけに両親の信念が何らかの影響をもっていることが示唆された。

- ② 小中学生のタイプ A と関係する養育態度に両親の学業や学歴面での達成を重視する信念が反映されていることを確認した。両親の信念が養育態度を媒介手段として子どもに同様の信念を形成しタイプ A の発達につながる一連の過程が実証された。
- ③ タイプ A の個人的先行要因として自己愛パーソナリティに注目し、自己愛パーソナリティとタイプ A との関係を見いだした。この結果を踏まえ、信念、自己愛パーソナリティ、タイプ A の 3 者間の関係をモデル化する可能性を検討することができた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

タイプ A の発達モデルについて旧来のモデルの難点を指摘し、その解決をめざし一定の方向付けを行ったところに本論文の特色が見られる。タイプ A は心理学的な研究も相当数行われてきているが、主に医学を中心とした学際領域で研究されてきた為に、それらを体系的に整理し実証に結びつけた例はこれまでもごく少数のみであった。したがって、心理学に軸足をおき諸研究を展望し、さらに中でも心理学的なアプローチがもっとも有効な発達に関する未解明の課題の実証を行った本論文は一定の意義を有するものと考えられる。特に、「達成的・競争的な価値観に基づく親の信念」、「親の養育態度」、「学業や学歴面での達成を重視する子どもの信念」、「達成的・競争的な生活習慣」、「学習の動機づけ」、「自己愛パーソナリティ」などの心理学的変数とタイプ A との関係を明らかにした点で、本論文の意義は大きい。

しかし今後の課題としては、心理発達の研究にもかかわらず、もっぱら横断的な研究法が用いられているので、縦断的な研究方法により、さらに生態学的妥当性を高めていくことが求められていると言えよう。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。